

dilemma

2020 SPRING/SUMMER

SPIRAL

2018年

4月2日(月)

入学式だった。

これは少し期待していたが、大学だからといって、とくに変わったことはないようだ。

変わったことは、入学式のあとだった。

教室の対角線の隅でおなじ音楽を聴いている人間がふたりいた。めったにないことだ。おれは片方に声をかけたあと、すぐ話して、もう片方にも声をかけた。ふたりの人間の性格は、まったくあバコバなように思った。

学生としての生活がどうなうかというお話が教授陣からあつたのち、新歓と相成った。飲み慣れない酒を飲んだのでどこをどう歩いたのか記憶にないのだが、おれは謎のカラオケボックスにいた。

時間の感覚はなかつたが、おそらく深夜だった。かなり酩酊していて状況がよくつかめないうのだが、それでもほんとはく、出会ったばかりの男女が数名、まあこれから何か歌いましょうか、といった感じの、むずむずした雰囲気があった。

こういう雰囲気があると奮発してしまう。おある売れ線をおよいびする男たちが歌っていた。女の子たちもおある売れ線をおよいびする声で歌った。

それでおれの順番がきた。おれは泥酔しながら、ローリング・ストーンズの『スタート・ミー・アップ』を熱唱した。もちろん、ミック・ジャガー直伝のダンス付きである。みな、引きたおれていたようだ。

いつか、おれの表が皆に認められる日がきくと来る。それが今日ではないにせよ、明日ではないにせよ、一年後、十年後、百年後にはきくと来る。おれはそう信じている。

しかし、このときおれは気づいていなかったのだが、無我夢中でダンスをつづけるおれのそばで、ふたりの男がストーンズのメンバーのまねをしていたらしい。それは教室の対角線でおなじ音楽を聴いていたふたりの男だった。

ちなみに、彼らふたりが聞いていたのはFleet Foxesだった。ありえない。

4月21日(土)

弘文から電話があった。こんど東名阪でライブをやるらしい。おれの代わりのベースを見つけたそうだ。

見にはないが、と誘われたが、やんわり断った。

もう道を違えたのだ。いまどうつきあって何になる、という気がする。

しかし、もうすこしおいつらに我慢していたら、メジャーデビューとがあり得たのかな、という気がしなくもない。

デビューしたところで、嬉しいのかどうかはベツの話だが。

という話をふたりにしたところ、バンドやるか、ということになった。たまに運命がおれを導いているような感じがする。いろいろなところを行ったり来たりしたところで結局、またしてもリットンバックナーを引、張り出すことになる。

研究室におれが持ち込んだハードケースを見て、「なにそれ、ステイパーライフル?」と言った女の子がいた。ながながのセクスだ。

4月23日(月)

ギタリストというものは、みんな陽キャなのだと思いついてきた。どうしても目立っからだ。絵としても音としても目立つ。

これはもう、どうしようもない。

そういう位置に立っているから、陽キャでなければならぬだろう。と、自動的に思いついてきた。

しかし、どうやら常識を改めなければならぬようだ。

章に、こいつはほんものの根暗だ。いや、根暗というか、マニアだ。マニア? うーん。

まあ、なんでもいいが、とにかく典型的なギタリストではない。だいたい、高校を留年しかけるくらいバイトに打ち込んで買ったためたものが、ギターそれ自体ではなく種々のエフェクターなのだから、そこからして感じが全然違う。アンプに繋ぐまえに、まずMacBookにギターを繋いでいた。あれはいったい何なのか。

そしてこいつは、手だけではなく足でも演奏しているように思われる。なにをやっているのか、全然理解できない。あとから録音を聞き直してやると意味が分かる。とっせし音を合わせろって無理だ。

何者なのだ。

ちなみにギターケースよりもハダセルボードのほうが重たい。ネルス・フラインがおまえは。ちなみに、かなり背が低い。

そしてドラマーというものは、みんな根暗だと思いついてきた。どうしても目立たないからだ。いて当然、あて当然だとみんな思いついてきた。これはもう、どうしようもない。かといって、司、こいつは根暗ではない。かといって陽キャでもない。なんだらう? 楽観主義者?

なんでもいいか。

うまく言えないのだが。

どうせ世界はいずれ終わるのだから、せめてそれまでは。

正確なテポを刻んでいこう。そんな感じだ。
章仁が足元のエフェクターを踏んで冥王星あたりまで
飛んでいってるあいだにも、テキサスで広大な農地を
耕している。再帰性のあるリズムなんだ。完全に力が
抜けている。かといってテポを外したりはしない。
音楽は時間と空間の芸術だが、この時間は、それが
あるひとつの規範……定理……いや、違うな……
そう、音楽におけるテポは、日常を字でいるんだ。おれたち
がそのうえで考えたり、遊んだりするための日常を。
そういうことを思い出させてくれるドラムだ。

ちなみに司はちんと太りすぎだ。

6月2日(土)

信州の山奥でやっているフェスへ行った。

陽子は、

ええと、こいつはおれのリットンバックをスティーヴン・ライルと
呼んだすだ。

この子と、章仁と司とで出かけた。

場所柄のためか、レイド・バックでチルな感じだったが、なぜ
か陽子の具合が悪くなった。

理由は、「みんなおなじような格好をしてるから」。みんな
キャンプ系の道具を持ってくるから、自然とそうなるほうののだが。

「そういうのって、嫌だったんじゃないの？ そういう同調圧力が
嫌で来てるんじゃないの？ こいつらどうせ学生が終わったら
安定した就職先に落ちてくんでしょ？」とかなんとか言っ
ていた。

ビールを飲み過ぎていたせいもあるだろう。

なにが章仁と喧嘩をやっていた。司はおろおろしていた。
気にせず音楽を楽しめと章仁は言っていたが、どうなんだろうな。

ちなみに、信州まではレンタカーを借りて、みんなで行った。
アメリカンスピリットの売子？ お姉さん？ が会場でみんな
に煙草を配りまくっていて、夢のようだった。帰りの車中、
運転して東京に戻るとき、もらったクスビの最後の一本
をきれいに吸い終えた瞬間にレンタカー屋に着いた。
吸い殻入れには夢のかけらがパンパンに詰まっていた。
夢、終わりであった。

8月14日(火)

音楽活動のいやなところは、わりと全然華やかでないところだ。なぜ、すべてのスタジオは、じめじめとした地下にあるのだろう。そのせいで、ほんとに悪いことをやっているような気がする。

そして、なぜ、楽器はこんなにも重たいのだろう。

金をやたらとかかる。

好きでないことをやられない。

それでも楽器で演奏すると決めたのだから、やらねばなるまい。あと一週間ほどが。

曲は三つできた。

今日、章仁が陽子をスタジオに連れてきて、自分のかわりに歌わせろと言いだした。おれと司はちんと虚を突かれたが、聞いてみないとわからんことではあったん合わせた。で、どうなんだろう？ いまも録音を何度も聞いているが、あまりピンとこない。

そもそも曲のキーは章仁の声にあわせて作っているからなあ。すこし上げにほうがいいのかは。このさい、コードの勉強もやりなめそうか。紅一点が必需だという章仁の熱弁にあえて反論はしなかったが、いまの段階からマーケティングなんか考えてどうするんだという気をするし、そもそも章仁がマーケティングなんか考えるタイプかねという気をする。

8月19日(日)

学祭だった。普通だったな。こんなもんだろう。

Text Counter

Billy Milligan's

ROLLING MARUTA

SUPER JUMBO

Tara tara's

Goo Choco Lantan

John S. Kennedy

PRIMELIX

RED KEY CASE

colour fax avenue

DAI KATO

BEHOODO

Subliminal

KILLER BEE

240GL

8月23日(木)

南青山のとある店からコンタクトがあった。

fai aoyama というところ。学祭を見ていてくれたようだ。見てるんはいるもんだね。

もろもろの宣伝に記載するバンド名が必要になったので、四人で考えた。

これは司がじつに良い方法を知っていて、まず四人で居酒屋にたぐれ込み、各々が焼酎をロックで三杯飲んだのち、誰かがおもしろにノートブックを取り出し、同席した全員が酔った勢いで思いついたバンド名をどんどん挙げていて、ノートに記帳していくというものである。

この方法のこつは、案を出している最中、酔った状態のまま「これにしよう!」と決めないことらしい。

翌日、みんなしゃかり酔いが醒めてから、あらためて吟味するのだ。

そういうわけで、あるていど案が出尽くしたあと、きれいに忘れてカウオケに行った。みんな、思い思いの歌を歌った。誰にも気を遣うことのないカウオケほど、楽しいものはない。陽子がキャンティーズを歌っているとき、章に「やめてくれ!」と言って、ソファの上で身をだしていたのは何だったのか。

司はなぜ、狩人の『あずさ二号』をおれと熱唱したがるのか。バツに信濃出身でもないのに。おかげですっかりハモリが上手くなってしまった。

も、とちゃんとした方法で上手くなれたかったのだが。いつか音楽雑誌にインタビューされたりして、そういう話題にならう。ああ、うちのハモリはカウオケにハマるんです。って答へにとして、それでどうなんだろう。むしろ、か、こいいのか? リアリティがあって親しみか、もてる?

いや、どうでもいいな。まあ、たたくも、絵に描いた餅だ。

ちほみに名前も、ちゃんと決まった。

colourfax avenue

これだそうだが。

意味はよくわからない。か、なんとなく合っているように思う。

10月24日(水)

最近やたらと陽子から電話がかかってくる。出たところでどうでもいいような話だ。何が起きているのかわからないほどでくちくちでもないのだが、困った。わりと面白いバンドに当たってきていると思うのだが。

11月1日(木)

香歩から電話があった。もう会うつもりはないと伝えておいた。寂しいが、仕方ない。彼女とあれだけいろいろ話しておいて、残ったものは日記を書くためのペンだけか。そして、このペンもいつかなくしてしまうのだらうな。お、わりといい文章じゃないか？
文豪の素養があるのかもしれないな。
「はい」。

12月31日(月)

両親に電話だけしておいた。達者にやっているようだ。

2019年

1月24日(木)

友々のライブハウスとわりといい関係ができてきた。
こういうところは司がうまくやってくれる。

2月14日(木)

陽子に告白された。

2月16日(土)

経験則からわかっているのだ。バランスが大事なのである。Camera Obscuraにはおいたり、AURORAにもおいたり
女の子がいる。ニューオータニも Slowdive も トーキョーハズ
も女の子はひとりだけだ。そして後者はしばしば解散
の危機に陥った。いや、こんなことはたんなる詭弁に
すぎない。男女比率がバンドの結末に及ぼす影響を
統計的に算出した先行研究は存在しない。調べれば
あるのか？ CiNii で検索かけてみるか？ 見つけた
ところで役に立たないだろう。そもそも個別のケース
なのだ。信じがたいことではあるが、みんな唯一の存在
である。そして代替の予かない唯一の存在を組み合
わせて得られる信頼関係の結果は、いつか予測できない。
あるていど検討はついでしようのだが。

書いていたら章仁から入電である。出たくないが出るほかないだろう。

2月17日(日)

構図を整理すると、

陽子はおれのことが好き。

章仁は陽子のことが好き。

おれは別に陽子のことが……いや、かわいいとは思わが……

そういうことをするよりは、このバンドが面白いので、この

手まがよい。

司によるアドバイス。

「一回三人でセッティングしてみたらいいんじゃないかな」

まあ、頼りにならない。というか、司は司でや、ほり何か
おがしい。虫とか怖がらないし。こいつからは、嫌悪という
感情がすっぽり抜け落ちてきている気がする。

それは人間の情操を構成する、じつにたいせつな
要素であると思うのだが。ひろがえて、章仁はわりと、
音楽以外のことで、ストレートな人間である。

それがなしてあんな、冥王星みたいな音を出すのか
わかんないが。

いや、そんなことはどうでもいい。

どうしたものが。

まあ……

正面切。て伝えるしかないんだろうな……

2月18日(月)

なぜか陽子に平手打ちをされた。青春という感じだ。

バンドが面白くなったのでこの手でいいという

意向を伝えた。

陽子はわりと落ち着いていた。

章仁もわりと落ち着いていた。

が、やぶから棒に陽子が、「じゃあバンドはやめる」と言った。

おれはかなり動揺した。

えーっ……って感じ。

しかしまあ、章仁も納得していた。

えーっ……。

でもわりと陽子の声にあわせて曲、直したりしてたのおれ
なんだけど……。といったことを告げると、陽子から
平手打ちされた。これ自体は青春ほくて良かった。

っていうのも、よくないんだけどな。もっとピュアに傷ついたり

せねばならんのだが。あのときふたりの胸中はどうな

たらたろうとか、思案するべきなんだろうが。どんどん

感覚が鈍ってきている気がする。いろいろなことが鮮明

でない。とにかく、どうするべきか考えねばならない。

幸い、曲が書けないということはない。

2月20日(水)

香歩から連絡。このタイムズが、男らしくストイックに話をして切る……というわけにはいかず、あ、たこを話した。どう思ったのかはわからない。ずいぶん長いこと話したと思ったが、電話を切ってみると十分ほどしか経ってはいなかった。ほんとうは話したくなかったんだらうか。

3月1日(金)

あまりに頭が痛いので病院へ。おそらくストレスでしょう。だってさ。まあ、そくだよな。人間関係、わかんないです。おれは音楽がしたいだけなんだ。って、いったん諦めた人間の台詞じゃない気がするが。しかし、音楽そのものを諦めたわけではなかったからな。弘文のやつら、東石阪ツアー、うまかったのか。

4月15日(月)

こしばらぐ南青山で演奏させてもらっている。わりとちんちん呼んでもらうて嬉しい。というか、司の手腕に脱帽。だいたいどのウイグハウスに行っても、オーターと親しそうに話している。お客さんの反応はいいようだ。もちろんである。われながら、わりと頑張っていると思うし。

みんな音楽が好きなんだよ、なんだかんだ言ってる。スタミタだよ。

わりと現場肌だ。

昔のことだが、弘文たちとやっていたころは、だいたい二時間くらいでみんな練習に飽きて、終わりにって感じだった。おれはそれが納得できなかった。そんなんじゃ駄目だと思ってる。

しかしいまは、いったん集まれば四時間は軽くやれている。予想していたことだが、東京は層が厚い。人間の量が違うから、当然、ちや当然だが。ウイグハウスで出番を待っているときに、度肝を抜かれたりする。上を見てもきりがいいですよ。そして音楽に上も下もありません。

4月17日(水)

キャンプを下ることになった。

どうやら各々が自然に飢えていたらしい。精一杯シティボーイのふりをしていたが、寢はわりとみんな田舎から出てきている。

こんどの休みに司がキャンピングカーを実家から持ってくるという。どういう実家なのか。

持たざる者と持つ者。後者に、司は属するというのか。あの鷹揚とした性格は金持ちの余裕だったのか。実家が太いミュージシャン。最強じゃねえか。くそ。うらやましい。

4月24日(水)

秩父のオートキャンプ場であった。

平日のキャンプ場は天国にもっと近い。誰もいないからだ。

歌、たり踊、たりした。

翌日の朝、陽子と散歩をした。

ごめんね、と謝られた。なにも謝ることはないと言っておいた。結局バツは続いているのだから、おれはなんの文句もない。しかし、まあ、彼女は謝りたいと思うたんだろう。わかろうはくもない。

おれはそういうことをあえて話さないところがあり、そのうち運命から罰を受けるのではないか…… ほんだが大仰な言い方だが…… と、すくすくびくびくしている。

信頼関係 というやつだ。

おれは…… 興味が無いのかな。他人に。

香歩は元気にしているのだろうか、とすくすく思った。

歩いているときに、青色と紫色の、房付きの「どうが」小さくなったような花が、たくさん咲いているところに出た。ふたりとも名前を知らなかった。

花の名前をほの言えることで、とてもかっこいいと思う。だいたい、言葉は、ほんらい機能的な性質のものだ。これはテグルです。これは食器です、その醤油取ってくれ。この鉄筋、あちには運んできて。ローテーターさん

ありがとう。そういった具体的かつ有用な指示の機能をものに言葉は、とても役に立つ。重宝がられる。

ひるがえて花の名前は、なんの役にも立たない。

あそこで咲いていた花の名前を知っていたところで、

バツに…… 仕事が出来たりとか、そういうことには繋がらない。

でも、だからこそ、花の名前を知っていることは尊い。

花の名前を知っていることは、世界のいろんなところで生まれた音階を知っているみたいなもので、

意味はないんだけど…… でも、楽しくて、すてきだと思う。

かといっておれ自身、バツに花の図鑑を読んだりするわけじゃないんだが。

誰かから教えてほしいんだよね。そういうのって。

それで感心していった。

というような話を陽子にした。



5月1日(水)

きょう、練習のあと、あまりに頭が痛いので病院へ。
同期的に痛くなる。いやになる。

町医者、原因わからず、前もめたが「ストレスだ」と診断
されたと言げ、いまほどうなのかと問われたが、まったく
人生充満していると答えておいた。

うらやましいことです、健康にはそれが「いらほし、……」というか、
それが健康ということばなんですがね……と、お医者様は言っ
ておられた。

いろいろ症状を細かく聞いてくれるいい先生だった。

けれど年々、目が悪くなるというわけじゃないけれど、
ものをうまく見ていられない。なにかにじっと集中しほう
とするとつらい感じがする、と相談した。

大学病院に行ってください、と紹介状をくれた。

あと、痛み止めもくれた。

バファリンの半分はやさしさでできているというが、これは
ぶっちゃけ成分表示の虚偽にあたる。

しかし詩は法をも越えて行くのである。人間は美しい。

おれが裁判官だったら有罪にする。

6月16日(日)

司の発案で、つぎの夏期休暇に日本一周を取行する
ことになった。

目的は、各地のウイグハウスに段り込みをかけ、経験値を積ぶこと。

どこへ出しても恥ずかしくないバト……ではないのだが、
そんなことを言っているのは始まらない。

そうなるために、がんばるのだ。

いろいろと忙しくて、大学病院へは行けてないが、頭痛も
わりと治まっている。

無理ということはないだろう。

6月28日(金)

各地のウイグハウスに電話をかけつづけている。

ウイグハウスの電話というのは、じつに奇妙だ。

まず、かける時間が重要だ。だいたい夕方から忙しくなる
から、それまでに繋ぎたいが、あまりに早すぎて誰も出ない。
深夜までつづくバトののち、オーターが朝まで粘っていた場合
などには、昼三時にかけても、まだ先方の眠気が伝わってくる。

そうした頭に「東京から行きまず、ウイグマせてください」と
伝えると、相手ののみこみまでに時間がかかる。

そしておかしな時間が生まれる。

ある店などは妙に不審がり、「うちは間に合ってるよ」とか
言われた。布国がなにかの押し売りとか勘違いしている
のだろうか。

あまりに頼りがないので三人の地元を中心にブッキング

していくことになったが、この作戦のほうがうまくいきそうだ。
目標があると練習にも身が入る。

7月8日(月)

章仁の発案でツアーTシャツをつくることになった。
デビュースラしていないのにそれはどうなんだと言うと、
ふりでもいいからやっておけば、あとから成果がついてくる
という答えだった。
一理ある。

やつこのこういう行動力にはかなわない。
章仁によるデザイン案は数十種類あった。
授業中、やけにまじめにノートをとっているなと思っていたら、
これを描いていたらしい。
そのうちのひとつを採用した。

7月16日(火)

ツアーであるならば、日程が書かれていなければならぬ。
ということで、ブックイングをがんばる動機になった。
日程はほぼブックスした。

ツアーの名前は『PLUTO TOUR』にした。
おれが章仁のギターの音色を評言したときの言葉で、

やけに気に入られたのだ。

名前そのものはバツにがまわれないが、わけわけのバンドが、
ミュージックシーンから冥王星のようを除け物にされない
ことを祈るばかりだ。

しかし、実際こうしてツアーTを完成させるころまで持って
いくのだから、章仁には感心させられる。
出発するのは八月に入ってからとなった。

8月11日(日)

出発した。
おれの地元、仙台から始めることになっている。
はじめのうちにはハンドルを握っていたが、ふらふらして、わりと
危なかった。途中のサービスエリアで急に運転を代わってもらった。
眼鏡を買わないといけないうがもしれない。
頭痛となにか関係あるのかな、これ。
無精して、け、きよく病院行、てないけど。
明日は古巣でライブ。

8月13日(火)

どこから聞きつけたのかわからないが、香歩が店に来ていた。
おそらく店長が知らせたんだろう。

元カノという言葉が嫌いだ。なにかがいやだ。語感？
そんなお手軽な言葉で説明できるようなものではないのだ。
章にはにわかには色めき立ち、かつての関係について、いろいろ
と聞いてきた。

おれは黙秘権を行使した。

司が話題を変えてくれた。

「演奏、どうだった？」とあいつが聞いて、

「よかったよ」と番歩は答えた。

ああ、取っ手かしい。

無理して大学なんか行かずに、地元に残って、ぶつに働いていた
ら、それはそれでよかったのかも知れないけれど。

それじゃあ自分に嘘をつくことになる。

かといって、音楽をやったとして、あいつを幸せにするなんて無理だ。
だから別れた。

でも、どうなんだろう？

かりに音楽をやって、それで何れくらい食べていけるとしたら。
もしもそうできたら、また番歩とやり直せるのかな。

そうなったとしたら、楽しいだろうな。

新潟へ向かう車中でこれを書いている。

8月14日(水)

新潟に着いた。

すてきな街だ。平地なので日本海らしくない。わりと賑
やかだ。下見としてみんなで店まで聞きにいったが、ハードルは
そこまで高くなさそうだ。

ほほほ。東京の音、てもんを聞かせてやるぜ。

……イヤミな台詞だね。

8月16日(金)

うん、まあ、や、ほり、まだまだアマテスだね。油断してほいけな
いんだ。うん……。

がんばろう……。

8月22日(木)

わりと忙しくて書けなかった。章仁の地元である金沢から、
富山や福井に行ったり来たりしていた。

思いのほか章仁の顔がなには驚いたが、出入り
禁止をくらっている店があまりにも多かった。

いったい、高校生の子、何をやっていたのか。

聞いてみると、

「ぜんぜん別ジャンルイベントに突撃して、1イズ・ミュージック
の極意を伝えようとした。おれのおかげで、いったい何組の

カップルが別れたんだらう？」

という答えだった。

それは音楽活動ではなく、テロリズムという。

9月4日(水)

かなり疲れていた。が、だいぶ回復した。

ここまで来たらたぶんすぐ疲れているだらうから、うちで休んでいくような日程にしよう、と提言した司は慧眼であった。

ここ数日、神戸にある司の実家で、至り尽くせりの生活を続けている。

墮落である。

金持ちだとは知っていたが、まさか芦屋の豪邸が実家だとは。車を近づけたら勝手に門が開いた。

ゲスト用の客室が五部屋もある。いったい何LDKなのか。クモクモLやDやKが二つ以上ある場合、それはどのように表記されるのか。

お手伝いさんという職業の存在をはじめを確認した。おれの時間に「料理長」が挨拶に来た。

というか以前、秩父のキャンプ場に行ったとき、こいつはキャンピングカーを神戸から持ってきたというこじゆのか。

めるときはよく考えもしなかったが、何なんだ。

あと、司のドラムがうまい理由がわかった。

完全防音の部屋ですと練習してたらだ。

腹が立つのを通り越して笑えてきた。

あと、神戸牛はうまい。

忘れないうちにメモっておこう。

京都、うわさには聞いてたけどや、ほりすげー。

大学が多いからなのかな？

いろんなことをや、ているんたがいてかなり影響された。

四条河原町のクラブでたまにまやっていた、エイセス・ナイトは忘れられない。

まさか、ほしもののマイケル・シヤクソンが出演するとは思わなかった。物販で売っていたバブルスふうのサブラスを買ってしまった。

夜遅くにシブめのチルアウトをまわっていたのは、スティックスの『ミスター・ロボット』ではなかったか。

シカゴの『ハード・トゥー・セイ・アイム・ソーリー』で華々しく夜は終わった。

めとは「メトロ」、なぜ地下鉄の駅のなかにクラブがあるんだらう？

意味はわからぬいが、おもしろいことは確かだ。

はそのノイズをやっていた。章仁はとて楽しんでそうだった。

あとは、大阪のひとたちのノリの良さ。

ヤジのうるささ。

これは他の街とは比べものにならない。

公演が終わり、たそぼから絡まれました。うたい何なのか。

あとは、ちやうどクアトロクがフェスティバル・ホールに来ていたのだが、そのチケットを司が手配してくれていて、三んで見に行けた。

まあ、伝説だな。このおじさんたちは。

もちろん演奏は最高。『ミュージック・イン・ストラップ』で大団円かと思われたが、

「テンタクヤれー！」

「ほめとんかー！」

「早おせえー！」

といったヤジが客席から飛びまくり、たぶん、クアトロクのおじさんたちをめでたにやらないのであろう、アンコールとなった。『テンタク』をまで聞いたのは嬉しかったが……

神をも怖れぬ街、大阪、としか言いようがない。

ドイツでそんな態度をとたら、すげー叱られるだろう。

あと、演奏中、いかに足元が見えなくなってきたので、眼鏡を買った。近眼と、あと視野狭窄があるので、

病院行、たほうがいいです、と眼鏡屋さんに言われた。

東京戻ったら、行、たほうがいいな。

そろそろ名古屋、行かないとや……。

9月24日(火)

ツアーの締めくくりに、お世話になっていた南青山のfai aoyamaで演奏した。自分たちでは意識していなかったけれど、かなり場慣れしたんじゃないかな。

お客さんの反応も良かったと思う。

やって良かった。

ツアーは余りまくっている。売れなかったわけではないが、章仁、発注しすぎ。

10月1日(火)

すっかり秋のいてきた。

章仁につきあて、秋葉原へ行った。

サーキットボードやら抵抗器やらコンデンサやらを
しこたま買い込んでいた。

エフェクターの自作をはじめめるのだという。

こうなると、もう才能だろう。

涼くなったせいか、夜の冷気で頭が痛む。
病院、行こう。

10月7日(月)

大学病院だ。

予約しておいたMRIへ通される。

昔、テレビがなにかで、スライダの中に金属の塊を
埋め込んでMRIに通したら、すごい爆発する
という映像を見たことあり(磁力がなにかが
関係していたのか?)、ちよとイヤだったのだ。しかし
どうすることもできない。

手板に載せられた鯛のごとく寝転がり、甘んじて
放射線の照射を受けた。

診断自体はつづがなく済んだ。

で、脳腫瘍だと診断された。

ほ、きり言て、立っているのが不思議なくらいです、

と言われた。

どれくらいでかいのですかと聞くと、指りこぶし半分
くらいはありますと言われた。

ほ、ほ、ほ、とあはれは笑った。

医者ほ笑わなからた。

つぎにお越しになるときはご家族を呼んでください。
と医者ほ言った。

..... えー、..... めんどくさ.....。

10月10日(木)

章仁ほかなり成長した。

冥王星に飛んでいく癖ほまったく治らないが、
聞いている人間が、

「あ、こいつ冥王星くらいまで飛んでるな」
とわかるようにはなった。

正直、こいつにはほどんなアドバイスも等価ほように思える。
コモン・センスが通用しないからた。

だからベーシストとして、どうすれば”調和させや
すいか”という意見を述べるくらいいて、細かくこう
しろとかほ、言っていない。

それくらいでいいんだと思う。
相互理解には限界がある。

可はずでジャズに凝っている。いい意味でだが、もう駄目だ。こいつは。ジャズなど聞き始めたら、ふつうの音楽では満足できなくなる。日々、わけのわからないセッションを練習までに考えてきて、いろいろ試している。

ある日など、ハイットを一回も叩かなくなった。縛りだという。しかしそれはどういう縛りなのか。

テキサスの農場の親父がじつは元IBMで、自宅にローカルコミュニティ用のサーバーを立てていて、そこから個人情報を取って、マフィアに売っているみたいな展開だ。意味がよくわからないが、それくらい変わった。

まあ、変わることはいいことだが。

これは章仁の影響なのだろうか。

章仁との会話。

「どうしてそんなに足元にこだわる？ なせギターじゃいけないんだ？」

彼からの返答。

「なら、逆に聞くが、なぜギターじゃいけないんだ？」
会話が成り立たない。

10月14日(月)

け、きょく一人で大学病院へ行った。

診断結果が出た。

余命半年だろうだ。

10月20日(日)

誰とも会う気がしない。

携帯の電源を切つて、ずらとスールの練習。

葬式でかける曲は『オール・ナイト・オール』にしようか。

10月25日(金)

せめて章仁と司には話しておくべきなんだろうか。

でも、どうやって話せばいいんだろう。

おれ自身、認められていないのに。

11月1日(金)

くよくよしていても仕方ないと、学校に顔を出した。

ふたりに話しておこうと思った。

研究室に入るなり、章仁に胸ぐらをつかまれた。

青春かよ。

ちなみに章仁はたばこがないので、ほしとうに掴んだ
だけの形になった。

連絡がつかないために、練習モウイブの日程もめま
くらまになったという。

司が方々に謝ってくれたそう。

「どういうつもりだったんだよ」と章仁は言った。

「すまない、としか言えなかった。」

「謝るのほかにだ」

「おたくそのとおりだ。」

「当分はいつもどおりのほほしとしていたが。」

「このとき、話してしまおうと思ったんだが。」

「すきに章仁が口を開いた。」

「メジャーだ」

「意味がよくわからなかった。」

「Tリーグ？ それともAリーグか？」

「小は、と司が笑った。」

「章仁が意味をすかせた声で言った。」

「メジャー・デビューだ。オファーがあった。ギリギリ間に合
ったな、明後日に先方に会いに行く」

それで、話すタイミングを失ってしまった。

11月6日(水)

だんだん、青のほい色が見えなくなってきた。

colour fax だ。

色つきのファクスは見て、見たことはない、そりゃ。

青山にあるちゃんとした企業で、契約書だの、いろいろあった。
ひとりずつサインした。

書類を前にして、もうぜんぶおいてしまおうかと思ったんだが。

あの部長さん？ の、三人ともキャウが違ふから絵になる
よ、という一言で、気持ちが悪く感じました。

これからレコーディングをはじめて、

できあがったら、その発売にあわせて、わりと大々的に
宣伝するらしい。

ツアーもやるらしい。

すごい話だ。

がんばってきて、おつかい。

おれ、それまで、もつのかな。

11月8日(金)

抱えきれなかった。仙台まで行ってきた。

喫茶店で、香歩に会った。

おれを戻したい、という話でないことだけは事前に伝えていた。

そういうところが小じだなと思う。

それはいいとして。

「悪いニュースと良いニュースがある。どちらから聞きたい？」
こんな台詞を最初に言うことになるとは、思わなかった。
悪いほう、と彼女は言った。

それで、伝えた。

脳に握りこぶしくらいの腫瘍があって、おそらく余命半年もない。

彼女は、しばらくはにも言わなかった。

それから、「ほんと？」と言った。

ほんと、と答えた。

涙が彼女の頬を伝った。

良いニュースがあることなど、とうに吹き飛んでしまった
ようだったので、デビューの話も伝えた。

すると喜ぶどころが、おれほりを顔にあてて、ほんとうに
泣きはじめた。

「そんなの、悪い話がおたつじゃない」と言われた。

確かに。

でも、上げておいて落とすってのもな。

しばらくして泣き止んだあと、ふたりには話したのか、
と言われた。

話せてない、タイミングがない、きっかけがない…… 勇気が
ない、と答えた。

だって、やっとなんか結んだのに。

いますぐ話せと詰め寄られた。

きみにはそういうところが昔からある。大切なことやつらい
ことはぜんぶ自分ひとりのものにして、ほかの人は置いて
けほり。

もう二年もバンド、やってきたんでしょ。それで、純粋に
音楽だけのつきあいのなの。そうじゃないでしょ。友達で
しょ。仲間でしょ。それ、言わないのって、ふたりへの
裏切りだよ。

11月15日(金)

やっほり、ふたりには、話さないことにした。

だって、いまおれが死ぬってわかったら、レコード会社
がどうするかなんて、わかりきってる。

この話はおかたことに、となる。絶対だ。おれだつたら
そうする。

三人のバランスで保ってるバンドなのに、ひとり抜けたら、
どうしようもない。

デビューさせる前に手を引くのが当然だろう。

おれはわかってくれるかもしれないが、俺にはああいうタイプ
だから、なにもかも正直に話してしまうに違いない。

そうだったら、デビューの話もなしだ。

もうレコーディングは始まった。もともと曲の数はじゃうぶしある。この感じなら、わりとすぐ終わらせうた。

数回のリテイクで一曲が終わってしまう。

こんなものでいいのかと思。たが、あとからミキシングして、やり直したりするらしい。

12月11日(水)

ひどい夢。

ふたりに、嘘をついたな、と言われる。

虚ろな暗闇のなかにふたりの声が響く。

知ってたんだぞ。おまえが死ぬことなんて。おれたちを信用してなかにんだな。

12月25日(水)

もっと早く、

病院に行けばよかった。病院に行けばよかった。

病院に行けばよかった。病院に行けばよかった。

病院に行けばよかった。病院に行けばよかった。

病院に行けばよかった。

2020年

2月26日(水)

レコーディング終了。

これで、いいと思う。

体調は……あまりよくない。

祝杯の誘いがあったが、断った。

けたしな顔をされたが、どうしようもない。

いま飲むのは、自殺とかわりない。

3月2日(月)

取り憑かれたように練習している。

ほとんど見えなくなってきた。

フレットの境目を追いかけるので精一杯だ。

もう見なくても、感覚でいけるようにしないと、まずそうた。

CDの発売は二週間後。今月末からデビューツアー。
メディアの取材もいろいろある。

ふたりとも、ごめんね。

3月8日(日)

立っていられなくなってきた。

久しぶりに、陽子から電話。

今年はキャンプには行くのか。行くとすれば秩父なのか。といった話をした。

あと、あらためて、おめでとう。だって。

行けそうにない、とはやはり、言えなかった。

3月11日(水)

ビデオの撮影。

メイクさんに、あまりに顔色がひどいと言われた。

そうだろうな。

3月13日(金)

あの花の名前、キャンプ場のほずれにたくさん咲いていた花の名前は、なんだったんだろう？

青のような、紫のような色だった。

3月24日(火)

うん、ツアーはなんてのは、

せつたいにぶりだ"は。

東京で、いっかいだけやろう。

あと一週間。

指は、動く。

ライブを成功させれば、あるいは、おれが"だの"になっても、

ふたりは続けていけるかもしれない。

指にたこが"できる"というのは久しぶりだ"。

ライブが終わったあと、楽屋のソファに倒れて、気絶したらしい。
いまは病院。
投薬が効いているのか、考えはあまりまとまらないけれど、
痛みはおさまった。

ああ、こんなことができるなんて、思いもしなかった。
生きていて、よかった。
楽しかった。

いまは、小康状態らしい。

ここ数日、両親が来たり、司や章仁が来たりして、いろいろ
あった。
さうは何日だ？ 何月だ？
いいが。そんなことは。

香歩が見舞いに来てくれたけれど、
声がうまく出なくて、もう、話もうまくできなかった。
ごめんね。

音楽をやっていることがよかったと思う。

ツア- 初日。

初日で、あとはぜんぶキャンセルになったみたいだが。

章仁と司が病室に来た。

章仁はおれの膝のところに手をのせて、ずうと声をあげて
泣いていた。

司は後ろのほうで立って、静かにしていた。

泣いていたのかな？

よく見えなかった。

すまん、と章仁は繰り返した。

書いておこう。ふたりのために。

怖かったんだ。

自分が死ぬことも怖かったし、

おまえたちの夢を、おれの死に巻き添えにすることも、
怖かった。

おまえたちはおれがいなくなってもやれる。

おまえたちの力は、おれがたれよりも知ってる。

でも、こんなチャンスは何度も巡ってくるもんじゃない。

おまえたちの力を信じていたけれど、

おまえたちの運まで信じていたわけじゃないからさ。

だから墓場まで持っていくことにしたけれど、

じっさいそうなることがわかってくると…… やっぱり、不安だね。

なあ、どうなんだ、CDは、ちゃんと売れてるのかな。
みんな楽しんで、聞いてくれるのかな。

あの新しい曲に歌詞を当てておこうか。

これが最後の仕事になりそうだ。

「SPIRAL」

本当はそうじゃない 逃げてるだけ
決めてしまうのが ただ ~~辛~~ 怖いだけ

~~失~~ ~~て~~ ~~く~~ 見失、てく ~~距離~~ 道理 君の言、た通り
忘れ去、た story ~~何気ない~~ 味気ないぬくもり
見失、てく道理 君の言、た通り
走り去、てくのに 何気ない君の

Hold me tight

狂、た夜を戻りたい ~~合~~ ~~つ~~ ~~つ~~ ~~つ~~ 響き合、たのが嘘みたい
理解に快樂求めたい 期待したいのに

~~招~~ ~~き~~ ~~き~~ ~~き~~ ~~き~~ 考えこんだり 諦めたり
無駄なアクションは ただ怖いだけ

見失、てく道理 君の言、た通り
忘れ去、た story 味気ないぬくもり
見失、てく道理 君の言、た通り
走り去、てくのに 何気ない君と

~~戻~~ ~~り~~ ~~たい~~ 踊りたい

狂、た夜の lonely night 忘れ去、た人みたい
したい見たいを求めたい リセットしたい

Hold me tight

狂、た夜を戻りたい 響き合、たのが嘘みたい
理解に快樂求めたい 期待したいのに

めんはニとができるなんて、思いもしなかった。

めんはに楽しいなんて、思いもしなかった。

このためにやっていたんだな、と思えたんだ。

だから倒れたのかな？ 弦が切れたみたいに。

それでもいいよな。すくなくとも音は鳴っていたんだ。

二年間ありがとう。

楽しかった。

よかった。

困るよ。

祐介、さみの葬式でかけた曲は「ホーム・スイート・ホーム」
じゃなかった。

そんなことを決める時間もなかったから。

ほんとうはほくたちの曲をかけてもよかったんだけど、
葬式に合う曲なんかが、ひとつもないだろう。
だから許してくれ。

すみらしいな、ほんとに。

さみはほくたちが思っているよりも、饒舌だったのかな。
日記だと、キャラが違うように見えるよ。

さみがいなくなるから、いろいろ大変だった。

ツアーはキャンセルになるし、レコード会社のほうは揉め(=揉める)して。

でも、もう文句を言っても仕方がないね。

章仁は強いやつだね。さみが逝ったあと、しばらくはどうしていいか
わからないうたたりけれど、身にして彼のもとを訪ねたら、
べつべつ音いるからサキットボードを相手にしてたよ。

実際、ほくもどうしていいかわからなかった。

はじめのうちはよかったんだ。

会社に事情を説明して、みんなに伝えていたからね。

でも、そうした精算がひととおり終わってしまうと、
なんだか空っぽになったみたいな気分だった。

どうしたってさみのベースが必要だったんだよ。

二年もやっていたんだ。さみじゃなきゃ、しっくりこない。

章仁は嫌がってたけれど、物はためして、
スタジオ・ミュージシャンの友に入れてもらったつもり。

でもね、まあ。

ほつり言て、さみより上手いんだけど。

でも、さみじゃないんだ。

正直、ほくは怒っていたよ。

どうして言ってくれるかたんだって、責めたいような気持ちだった。

でも、この日記を読んだら、なにもかわらなくて(まった)から、
もういい。

ふたりで話し、契約金でシーケンサーを買った。

はじめのうちはさみの音の録音を鳴らすつもりだったけれど、
やめたよ。ベースラインは新しく録っていくことにした。

章仁が、どう言ったらいいんだろう、
拒絶反応を起こしちゃってね。

これは死んだヤクの魂のものだから、

おれたちが自分の都合で変えてはいけないうて言ってる。

ぼくもそう思う。

大事な報告。

colour fax avenue は続く。

メニバーは... 入れるがもしれるし、入れないがもしれない。

わからない。

いまのところは、続ける。その意思だけ。

まいわい、クロはけこう好調で、アタマついていたから。

どうなるかわからないけれど、会社との契約はまじり続けている。

だから、続ける。続けられる。

これは、ママの読みのとおりだったんだらうね。

追伸。

いま、陽子に電話して、ママが気にしていた花の名前を聞いたよ。

ムスカリ、というらしい。

花言葉は、絶望、失意。それと、明るい未来、逃げない心。

なんだかまたく正反対だね。

墓前にはこの花を供えさせてもらうよ。

うん。

これからぼくはこの日記を持って、尊仁のところへ行く。

そして、読んでもらう。

彼はあんまり書か物が得意じゃないから、

ぼくみたいにして、こゝろ長々と書かさないでうけと。

そうだな、たまには、彼にも歌詞を書かせることにするよ。

これからは、ぼくたちが書くんだからね。

それじゃ、植介。さよなら。

ありがとう。乗ってきたよ。

司